若手研究者海外派遣プログラム
派遣終了報告書

1　派遣者	
所　属　機　関	国立国語研究所
氏　　名	鴻野　知暁

2　派遣計画 概要	
派　遣　国	イギリス
派　遣　期　間	平成 28 年 7 月 29 日　～　平成 28 年 8 月 31 日
派遣先機関名	オックスフォード大学東洋学部
（英語）	Faculty of Oriental Studies, University of Oxford
受入教員名	ビャーケ・フレレスビッグ
（英語）	Bjarke Frellesvig
研究課題名	オックスフォード上代日本語コーパスの統語情報の活用
（英語）	The Use of the Syntactic Information in the Oxford Corpus of Old Japanese

３　派遣による研究実績

（１）調査研究実績　　（研究計画に沿い、実施したことを記載してください。）

上代日本語において、主語・目的語などの文法役割がどのような格助詞とともに表されるのか、複合動詞の項構造がどのように決定されるのかが本研究のテーマである。

本研究で活用する『オックスフォード上代日本語コーパス(OCOJ)』のアノテーションについて、オックスフォード大学の研究員から学び、OCOJ のマークアップを実際に確認した。その結果、TEI 準拠の XML マークアップ形式によって統語情報が付与されており、各項に対して主格／目的格／斜格の三種類の情報が付与されていること、そしてコーパス内の語彙情報は“Lexicon”と呼ばれる電子化辞書から情報を取得できることが分かった。

動詞述語のうち、複合動詞でないものは“Lexicon”から項構造の情報を取得できるが、複合動詞の語彙情報は“Lexicon”にまとめられていない。そこで、複合動詞の項に関する情報を以下の手順によってリスト化し、Excel ファイルのデータとして参照可能な形にした。

①「動詞＋動詞」の形で連接している単語を複合動詞と認め、コーパスから抽出する。

②抽出した複合動詞について、「V1, V2 という各構成要素」、「複合動詞が取る項」、「項と複合動詞との文法関係」、「項に後続する格助詞」の４つの情報をコーパスから取得し、リストにする。

③連体修飾節内の複合動詞と、被修飾名詞との関係を調べ、リストに追加する。

上記のリストを利用して、複合動詞に対して目的格または斜格の関係にある項が顕在化している例を中心に分析した。“Lexicon”や既存の辞書類(『日本国語大辞典』など)を参照し、複合動詞の項構造が V1、V2 どちらの影響によって決定されているかを考察し、複合動詞の項構造がどのように決まるかを次の４つのタイプに分類した。タイプ１：V1 によって決定、タイプ２：V2 によって決定、タイプ３：同じ項構造を持つ V1 と V2 とが関与、タイプ４：異なる項構造を持つ V1 と V2 とが関与。このうちタイプ４は、先行研究によって、現代日本語では極めて珍しいとされているが、上代日本語では相当の例数を認めることができる。上代日本語と現代日本語の相違点を解明するために、タイプ４について研究を進めた。

まず、タイプ４の項の具現化について調べ、①V1 と V2 の項の両方が顕在化する場合、②V1 もしくは V2 の項のどちらか一方が顕在化し他方は解釈上補われる場合、③V1 もしくは V2 の項のどちらか一方が顕在化し他方はほとんど意識されない場合、という３つの場合があることが判明した。次に、タイプ４の V1 と V2 の特徴を調査し、①目的語が動詞と強く結びついており、辞書的な意味から容易に推測できる場合、②V2 が「時間」を項として取る場合、③V2 が「場所」を項として取る場合、という３つの場合にタイプ４の複合が起きやすいことが判明した。さらに、タイプ４の項の統語的位置について調べた。その結果、二つの目的語の語順に関して、現代語では非文法的と見なされる順序が、上代日本語では普通に認められることが分かった。

以上により、「上代日本語では、異なる項構造を持つ動詞が結合して新たな項構造を持つ複合動詞を生成することがあり、しかもこの現象は現代日本語よりも遙かに容易に起こる」ということを結論として得た。これは、語彙的な複合動詞が上代日本語で存在したことを裏付けるものである。

（２）基幹研究プロジェクトにおいてこの派遣が果たした役割

国立国語研究所のプロジェクトである「多様な言語資源に基づく総合的日本語研究の開拓」（通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開）では、『日本語歴史コーパス（CHJ)』の構築を目指しており、上代資料の一つである万葉集のコーパスを開発中である。上代日本語では名詞句が格助詞を伴わずに裸の形で現れることが多く、CHJ を利用して述語と名詞句との文法関係を調べることは困難であった。本研究で作成したデータベースによって、CHJ 内に出現した動詞について、OCOJ での統語情報を参照できるようになった。このことで、単純な連接関係・共起関係の情報だけでなく、述語の項構造の情報を活用できるようになり、従来の方法論にはない、コーパスを利用した新たな文法研究が可能となった。

（３）所属機関における学術分野に貢献する事項

現代日本語について、意味的・文法的情報の付いた複合動詞レキシコンのデータベースが国立国語研究所から既に公開されている。これと合わせて、本研究で作成された上代日本語の複合動詞のデータベースを利用すれば、通時的な複合動詞の文法研究を行うことができる。現代の話者にとって上代語の動詞（特に複合動詞）がどのような項を取るかは言語直感がきかず、既存の辞書類にも項構造の情報は載っていないため、このデータベースは本機関において利用価値が高いものである。

本研究によって、現代語と同様、上代語にも語彙的な複合動詞が存在することが裏付けられた。そして、異なる項構造の複合が現代語よりも容易に起こり、現代語では認められない統語構造が上代語では許されるという、日本語学の語彙論および統語論の上で興味深い知見が得られた。

（４）研究成果（著書、論文及び報告書名・講演題目）

"Argument Structures of Complex Verbs in Old Japanese", A special presentation at the Research Centre for Japanese Language and Linguistics, University of Oxford, United Kingdom, 26 August 2016.

（５）見込まれる研究成果（著書、論文及び報告書名・講演題目）

「上代日本語の複合動詞の項構造―異なる項構造の一体化を中心に―」第 149 回 NINJAL サロン発表予定（国立国語研究所、2016 年 10 月 11 日）.

「上代日本語複合動詞の項構造の決定要因について」『国立国語研究所論集』に投稿予定.

（注意事項）

・本報告書は、帰国後１ヵ月以内に提出して下さい。

・この報告書を、本機構により刊行、Web 掲載、広報冊子等として公表することがあります。
この場合、内容に影響しない範囲で修正を行うことがあります。